一流の人に、無双の人文「ペテン師」になるために

二流の研究者には、一流になるための定型的なコメントを差し上げればいいが。

一流の上には、何があるか。

一流の上に、超一流があるわけではない。それはランク付けのための基準の外部に立つことであって、言表不可能なものであり、レトリックを通してしか、指し示せない。たとえば、「愚」という比喩が使われる。「大愚」（良寛）、「愚禿」（親鸞）、「パルシファル」（ヴァ―グナ―）。ここでは、それを、「ペテン師」と呼んでみる。

一橋大学の英文学者は全員一流である。『言語社会』を読めば、まぎれもないことである。だから、合評会では、「ペテン師」になってもらうための挑発を行ったつもりである。

見よ、『言語社会』第４号「特集（２）トランスアトランティック・モダニズム」に寄稿したＯ氏もＥ氏も「ペテン師」の酒くさい息をぷんぷんさせながら光りかがやいているではないか。彼らの師匠であるＦ・ジェイムソンとかＭ・クラインとかＪ・ラカンもそれに負けない「ペテン師」どもである。まず、彼らの土俵の上にあがって、そのルールを学んでみる。もちろん、それは大切なことである。しかし、自らが「ペテン師」をなるためには、「ペテン師」と対峙して、そこから、自らが、違うルールを作ること。素直であること、優秀であること、一流であることすら、障害となりうることに気づいていただけただろうか。一橋大学の英文学者は全員、潜在的に不良少年少女どもなので、未来はかがやいている。

「ペテン師」は、外部の人間をあざむかなければいけない、あざむくことで楽しませなければいけない、あざむくことを通して愛し、あざむくことで戦わなければ。あざむくことで電光を。そして、あざむくためには、窓から外を眺めているふりをするだけではなく、それぞれのやり方で外に出て吹く風の中に立ち外部と向き合うことが肝要となる。かくして、「ペテン師」だけが自由の風を吹かせることができる。

そのための青臭い挑発だった。要は、こんな内輪の合評会をしたり顔でやること自体が「文化左翼」じゃないか、と言って絡んだ・・・ということになるのか。因縁をつけたのが、慶応大学のおぼっちゃん教員だったのは、構図としても滑稽である。身も蓋もないことだったのかも知れない。惨憺たるものだったのかも知れない。

しかし、誰がこんなことを好きこのんでするものか。そこに、愛も戦いもあったことに気づいていただけただろうか。

慶應義塾大学法学部教授　武藤浩史